六百五十
貴重書
先陣武藏鐙
上
天保十七丙申
春新板
歌川貞重画
伊勢三郎
佐藤忠信
武蔵坊弁慶
片岡八郎
国
特別
196
国
2
119

40. 8. 26
ア30653

# 武蔵鑑

弘化二巳春

上冊

一拍亭芳席画

藤園屋

上梓



いまや春の兼る時津風ふく歳王扇の末廣元武蔵野の
ふるさとにてとゝめて世を捨つりて神武者とうたい恭平
樂の鳴物紙ぶすまの幕打ちさゝる機敷中酒のりの舌鼓とな
らさつゝあるさつゝ盃のさかてをすてて一巻勝負の興
ゆめかぐらくのめやうえやすうらせて秋の紅葉ゆる憑山
神が筆の命毛にかをそなへ
の鬼神を退治子供に気もうちるびく世秋の稚子落ちや
と驚ろかし印地打も止ゆらば陣取ゆ不自由なく例
事も芳席ゆが能翁とふ集あしろふことゞきせよとある
ゆふべの寒を凌ぎ實説を拾ひ集めたゞ〜戦陣武蔵
鑑とゝさすがふうけてとゝ名ばゝること爾

せんぐん

弘化二年巳春 新たん

出羽山人倭金誌

中原兼遠娘
巴御前
遠江国
住人
内田
三郎
家吉

まえだ

さか田の金たろうまさかどのふあがらかみそう手れたてをしたるをとりひきさるるを
らるるのぞう丸とのつりちろうつくえ
をまくとさるとてきたるあかりこと
さうくれそつれのあをひとす
かしまりみるりとのらいさう
ふぐのまをものかりあの
ちろぐろうあ
ちさるぐの
つるうを
井のさざ
ろうろぐの
すえ

▼えびどあちらぐのて
まこぶり大とうをこここう
のちのくらのくさうの
ぬえまとそきん時り
その名くうう
考くのち
さう白
まこうぐん
そも

坂田
金太郎

舎人今府と
よびけりちろふ
そのところえこの
くふまにじよ
鬼きぐくりり
まんでおんこえを
るやまずかまり
まるちらのくさう
ちくめのとろうり
山ぶれいぐもてこれを
なのぢをまこあるとき
きぐうとふあぐれのあと
たいらく今時ちの▼

▼えんど
あまるぐ
まこぐび
しろぐ今ちろの
きあをうをくそ
らいくさくちゅう
まんまちのくさう
よろこびぬひそ
めりくへられ名と
あくこあそさか田の

紙ふまろられ
いまくらぐのくふ
くれの長さとのくさくろふ
くそのれとら
ありときたえ
ろう

能登守
平教経

一條二郎
忠頼

神功皇后

菊地入道叔阿

たけ二ま
たちつるる
大まやを
ひとめてあし
とも
まやぜんをよくまれの

つぎ三
うんざーのそやぬくよりとあくまをうちつぶしまんぜんぶ
むらひとりひきひきうとまをうと
ひとりくらまのさくさくれ
ろくもりけりそのとし

楠帯刀
正行

佐藤四郎兵衛
忠信

倭金編
芳虎画
左馬頭
源義朝

倭金編

芍扇画

藤原光政
大宅太郎
駿河二郎
金子十郎
武蔵坊弁慶
亀井六郎

一枝画芳席

弘化二巳春新板

先達むさしあぶみ

下冊

上梓

鎮西八郎為朝

上平大
平貞盛

田原藤太秀郷

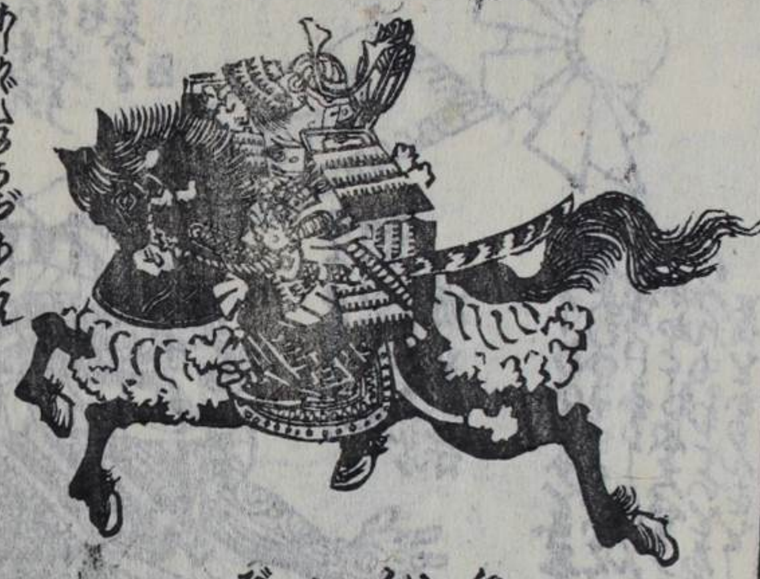
平親王
将門

駿河二郎
清重

左衛門宗持

伊賀壽次郎

新田左中将
源義宗



足利尊氏朝臣

みなもとのたかうぢ
せいいたい天こうよう十あ代のこうそ
世くあうぐうよう氏ご五代のそん也
その名をそんこうふあくるはん氏
一ぞうのりつらそれがやうでうぐ
ちゝのつくをのきさぶりうこうこうそ
ひさう者のあのせうぐんさゆんど
けんむ二年やうぐうとそのきこうこそ
ぐんこうはちまんとらんぐあうはんとを
のぐむ一ぞうびやうこうこうぐふ
うちまけつゝ人なりのたちこうび
大ぐんこうこうーこうこうぐんせあうろ
ぐ天ゲをまく武げの世とうー
るそん十よ代つぐきて天ゲーの
武しやうこうり
これをあーぐ公方とゆ
世の人のよくまるこころうり
そのあこうとたぐよう
これまさ文ちたくまく
あうぐの天ゲとさぐめん
ろぐ人のこうり
とぐ

◎六十人王
つのりとらと
だざいふのろせんぶ
◆
ちぐぶのとれまを
播遠保

◎天人王
てんのうぎょ
ぐんこうこそ
ふぢうらの
まさとうちう
てのれてそのき
むねんまとそうふ
うそのえ人せう
あうこのようーる
ふぢうらのたぐぶん
こうだるのとれ
やまをみるちくめのを
くうぬりてらよのこふを
者ぐをうるのを和
こうぐるのと
やまをの升ふのた
大ぐんりうえけう
のこうぬんれて◎

伊豫掾純友

◆利を
うしるし
いよのこそ
ぐうすく
ちうよまれ
ぐをぬりて
これをまぐだ
ぐうう
すまこのも
たうしう
ぐんでつふ
ぐぢうつまふ
ぐまこのこれ
ぐまぐだうう
しふれ
うり
ける

工藤四郎

泉小二郎親衡

木曾左馬頭義仲

三河守平知度

# 七曲舎倭金著
# 一猛齋芳虎画

# 御粧白粉 海内無類 天人香

一箱 價貳匁
一包 代 百五十文

この天人香は白粉の名方なり他家製法の品と日を同じうして語るべからず寒中の雪水に七度水干し家傳の藥露に浸し置て晒拔る極製最上の品なれば れみがきもしのあとふきとりゆへばそんのうと艶うるはしく香氣ふくいくとく色りしき薫を保支久し一年經てうせぬ蘭奢の薫常なる懐ろもとへ白袋の代をるべし●本化粧は一夜こえてゆうきたつことあり色を白くしまくふなをを玉のかんばせ冷艶全く雪を欺く実や上あき天人香 本朝白粉の冠たるべし●尋常白粉の者をるべきも分量の多少にかゝはらず品の優劣御照覧之上且試ふ化粧し給へ天人香の名目空しからぬ功能迅速なり

本家製法所 江戸本町二丁目 式亭三馬精製

国文
24L
43

本家藥法

正方本四二十目　左京三条書肆

天入香

白粉

丸百五十文

森鼎

文
図書
年度
文
ろ